

目 次

趣旨説明	1
挨拶	2
話題提供 金沢大学から 「手取川流域はエコ・ミュージアム」	2
レジュメ	4
話題提供 地域から 「酒蔵から文化の発信を」	7
話題提供 地域から 「人・つながり、築く白山市」	8
意見交換	10
まとめと挨拶	17
閉会	18
日程・プログラム	19
あとがき	20

地域とともに！
金沢大学
自然・文化・人づくり・にぎわい

金沢大学地域貢献推進事業

白山市タウン・ミーティング 「手取川流域のあした」

「地域に開かれた大学」を目指して金沢大学が地域に果たす役割を考え、地域住民と語る場として「タウン・ミーティング」を実施してきました。平成14年度には能登地区(輪島市)と加賀地区(加賀市)で開催し、金沢市でのフォーラムと併せて、大学へのさまざまな要望を聞くことができ、それを機にいくつもの連携が芽生えています。今回は、手取川流域の8市町村が合併し「白山市」となることが決まった、その地理的中心にあたる、鶴来町で開催します。

日時 平成15年12月15日(月)
19:00開催(2時間予定)

会場 鶴来町「横町うらら館」
鶴来町新町タ1
(0761-92-0001)

参加
無料

参加申込みは必要ありません。
当日、ご来場下さい。

プログラム
金沢大学から
「手取川流域はエコ・ミュージアム」
神谷 浩夫 文学部教授

地域から
話題提供者
小見 麻利子(唎酒師)
辻 貴弘(白山連峰合衆国)

意見交換会
司会 水野 昭憲
(金沢大学地域貢献コーディネーター)

主催:金沢大学・石川県・金沢市連絡協議会 共催:白山連峰合衆国 協力:NPO法人「加賀白山ようござった」

お問い合わせ:金沢大学地域貢献推進室 TEL076-264-5290 FAX076-234-4052 E-mail:chiiki@ad.kanazawa-u.ac.jp
白山連峰合衆国 TEL0761-93-4851 FAX0761-93-4852

平成15年度金沢大学地域貢献推進事業

白山市タウン・ミーティング

総合テーマ 「手取川流域のあした」

日時 平成15年12月15日(月) 19:00~21:00

場所 鶴来町「横町うらら館」

総合司会 鈴木 漢(金沢大学 大学教育開放センター教授)

趣旨説明

水野 昭憲 (金沢大学地域貢献推進室 地域貢献コーディネーター)

地域と共に

皆さん、こんばんは。鶴来で何か変わったことをやる時には天気が変わると言われるそうですが、昼間は天気がよかったのに、急にばらばらと降り出したようです。このような中、お集まりいただき、ありがとうございます。まず、この会を主催するに当たり、白山連峰合衆国、NPO法人「加賀白山ようござった」、「横町うらら館」の事務局の皆さんに大変ご協力を頂いたことをお礼申し上げます。

さて、私から、ここにお集まりいただいた趣旨をご説明させていただきます。金沢大学が前はお城の中に居たのが、今度は角間に山ごもりということになって、皆さんと顔を合わせる機会が少なかったのではないかと思います。しかし近年、大学は地域の皆様の要望にこたえながら共に活動する必要があるということに目覚め、様々な事業に取り組むようになりました。昨年から文部科学省が実施している国立大学の地域貢献特別支援事業費では、モデル校(昨年15校・今年26校)に選ばれています。そこで、地域の方々のニーズを知りたいということで、今日のようなタウンミーティングを企画し、昨年度は加賀と能登で行いました。本年は「白山市」へ向けての合併が本決まりとなり、手取川流域の一体感が高まっているということで、この地での開催を白山連峰合衆国事務局に相談したところ、快く共催を引き受けてくださり今日に至ったというわけです。「白山市」といっても皆さんにはまだ何となく違和感があると思い、白山麓か白山郷かとも考えましたが、結局は白山市と言おうということになりました。今日は自由なご意見を出していただけるよう、よろしくお願いします。



挨拶

水原 保（白山連峰合衆国大統領）

かけがえのない財産 手取川

今日はたくさんの方々にお集まりいただき、うれしく思っております。また、金沢大学がこの地に足を運んでいただいたことにお礼を申し上げます。このこと自体が明るいあしたを保障しているように思えます。私どものこの地域で、平成17年2月1日には新しい「白山市」が誕生することになりました。その白山から流れ落ちる手取川は、我々住民にとってはかけがえのない財産であり、私たちにいろいろな面で恵みを与えてくれています。今回の主題「手取川流域のあした」をいろいろな面から考えていただき、愉快な一夜になれば幸いです。



話題提供 金沢大学から

「手取川流域はエコ・ミュージアム」

神谷 浩夫（文学部史学科・教授 地理学）

エコ・ミュージアムとは

今年から大学の地域貢献事業として、「手取川流域をエコ・ミュージアムとしよう」というアドバルーンを上げさせていただいています。エコ・ミュージアムというのは、日本に入ってきてまだ10年くらいの言葉ですが、今までも各地でいろいろな形で行われてきた地域振興、自然保護、史料館の設置に対し、エコ・ミュージアムは、町界や村界を限らず、一つの文化圏を領域として、その地域の魅力の研究・保存・展示を行い、自然資源・社会資源を発掘して地域の振興に生かそうというものです。つまり、自然の保護、地域の資源の発見を地域の振興に結びつけていこうという目新しい考え方であり、今後の手取川の流域や白山市の振興に役立つのではと思っています。

エコ・ミュージアムの特徴

エコ・ミュージアムの特徴は、第1に地域の学校であり、地域を知るための生涯学習の場であるということです。大学はそこで地域の研究や展示のお手伝いができると思っています。特徴の第2は、上流と下流で多様な文化を持ちながら水を媒介としてつ



ながっている手取川流域を一つの文化圏、「空間の博物館」として見て、その地域の魅力の研究・保存・展示を行うということです。また第3には、「地域まるごと博物館」というように、単にモノばかりではなく、地域に住んでいる方々の生活・文化・記憶を保全するということで、そこでも大学は、その地域の生き様、暮らしぶりの魅力を外へ向かって情報発信するお手伝いができると思っています。

私は文学部の地理学教室に所属しており、自然環境、自然と人間とのかかわり、その地域の形成の歴史について研究しているのですが、手取川流域をエコ・ミュージアムとしようとする場合、大学の持っている調査研究の機能をできるだけ提供したいと考えています。しかし、地域が大学にどういう要望、期待を持っているかがなかなか伝わってこない部分がありますので、今日の会合ではその点に期待しています。

具体的な構想

こちらが持っている具体的な構想の第1は、「手取川談義」の開催です。すでに10月にその第1回として、手取川の堤防に着眼した講演を行いました。2回目はサケ漁の南限である手取川河口のサケ漁についての講演会を予定しています。構想の第2は、小中学校の社会科の副読本や生涯学習の教材として使ってもらえるような、『手取川恵みものがたり』の刊行です。具体的な目次案を資料にお示ししましたので、今日はこれについても皆さんのご意見を頂ければ幸いです。

テーマ 「手取川流域はエコ・ミュージアム」

講師 金沢大学文学部地理学教室 神谷 浩夫

1. エコ・ミュージアムとは？

「エコ・ミュージアムとは、地域固有の魅力を掘りおこし、それをまちづくりに活かしていくためのしくみと活動です。地域まるごとを博物館とみだて、地域の魅力的資源の再発見・学習・研究保存・展示の活動を行います。エコ・ミュージアムは地域の持続的な発展に寄与するもので住民主体で運営を行っていきます。」

エコ・ミュージアムの特徴

<地域の学校>

エコ・ミュージアムは地域を知るための生涯学習の学校であり、また地域の担い手を育てるため、おとなから子供までが学べる学校です。

<空間の博物館>

エコ・ミュージアムは、町界や字界を領域に限るものでなく、ひとつの文化圏を領域として地域の魅力の研究・保存・展示を行います。

<地域の研究所>

エコ・ミュージアムは、地域の発展のための研究所として、住民が専門家と共に地域のことについて継続的に調査・研究していく必要があります。

<時間の博物館>

エコ・ミュージアムは、地域で培われてきた人々の体験と残されてきた記憶を共有します。例えば、ある時代の地域の伝統的な生活様式などを体験できる場です。

<地域の魅力の保全センター>

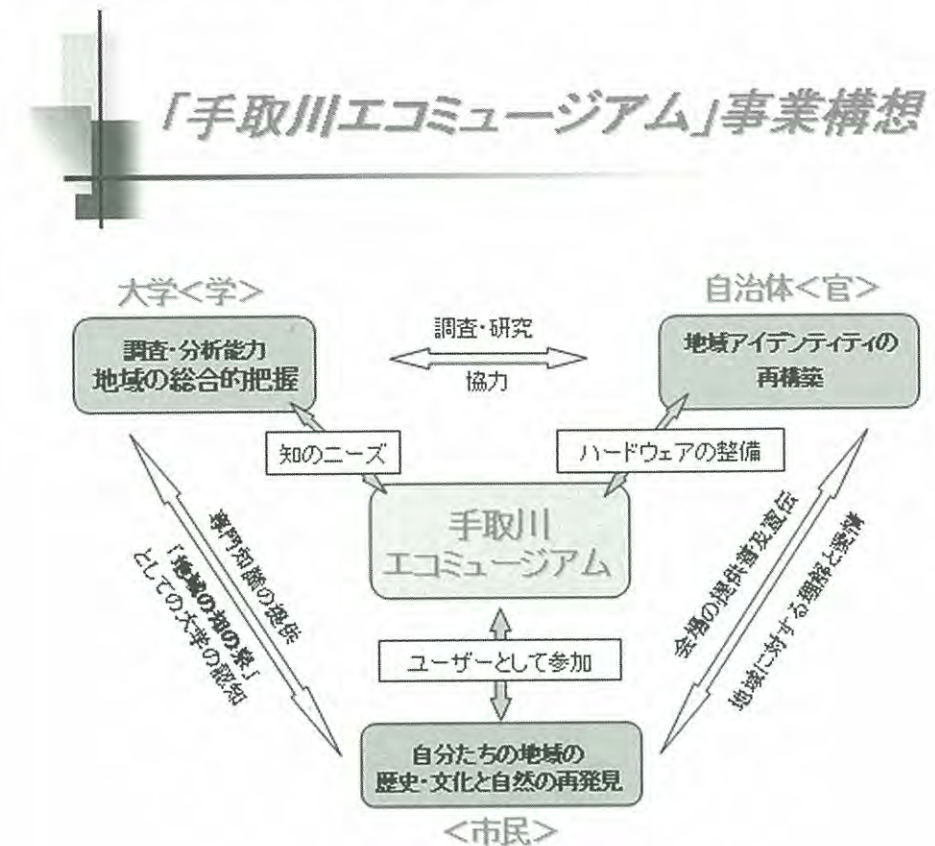
エコ・ミュージアムは、地域の魅力を保全する博物館です。しかし、魅力とは「モノ」だけでなく生活や文化・記憶をも保全します。また、それは元来あった場所に保全するのが原則で、地域まるごと博物館とも呼ばれます。

<住民と行政のパートナーシップ>

エコ・ミュージアムでは、住民と行政が力を合わせながら、ひとつの非営利団体として、地域の運営を行っていきます。

2. 金沢大学の「手取川エコ・ミュージアム構想」

(1) 手取川エコ・ミュージアム構想の概要



(2) 事業の内容

- 1) 手取川談義の開催
- 2) 「手取川恵みものがたり」の刊行
- 3) 手取川研究会の開催

.....

手取川の恵みものがたりー加賀藩を支えた川の文化誌ー（編集企画案）

1. 編集方針

小学生・中学生向けの副読本として活用できるような内容を盛り込む。手取川が地域にもたらした恵みを「加賀藩の穀倉地帯」として位置づけ、農業用水や酒造業など従来型の産業による水利用から利用から流域に立地する先端産業の水利用に至るまで、幅広い手

取川の水の恵みを解説する。この冊子を活用することで、小学生・中学生が手取川の恵みに対する恵みに対する理解が深まると期待される。

本書のユニークな点は、流域の自然環境だけでなく川の「恵み」にも広く焦点を当て、人間生活と川とのかかわりを重視している点にある。

執筆は、1項目につき2頁として25項目計50頁をメドとする。

2. 目次案

<流域の自然環境>

- ① 手取川流域の自然環境
- ② 扇状地地形と霞堤
- ③ 土砂供給と砂丘列、千里浜

<水の文化と伝統的な人々の暮らし>

- ④ 扇状地の集落形態
- ⑤ 近世の交通路と水運、北前船寄港地
- ⑥ 白山信仰圏

<豊富な水を活かした農業>

- ⑦ 七ヶ用水と農業水利
- ⑧ 砂丘と加賀野菜

<手取川上流域の恵み>

- ⑨ 電源開発とダム建設
- ⑩ 森林資源と木材加工業

<川のもたらした伏流水と砂礫を利用した産業>

- ⑪ 扇端の湧水と水産業
- ⑫ 砂利採取

<水の恵みを活かした製造業>

- ⑬ 食品産業
- ⑭ 繊維産業
- ⑮ 電子産業

<水を直接的に供給する事業>

- ⑯ 融雪装置と地下水
- ⑰ 水道供給事業

<地域活性化の取り組み>

- ⑱ 白山麓グリーンツーリズム
- ⑲ GISで学ぶ手取川観察マップ

話題提供 地域から

「酒蔵から文化の発信を」

小見 麻利子（小堀酒造唼酒師 鶴来町内酒造会社勤務）

唼酒師とは

唼酒師とご紹介を頂きました。これはワインでいうとソムリエのような資格ですが、ソムリエほど難しい資格ではなく、日本酒研究会の行うアルコール飲料の歴史、種類、製法についての筆記試験と何種類かの日本酒の唼酒試験に合格するともらえる資格で、石川県に250人ほどいらっしゃいます。

鶴来をお客さまに愛していただくために

酒蔵には古い歴史のあるものが多いのですが、私どもの酒蔵も、創業が享保年間ということですので、280年ほど経っています。建物も非常に古いものを修理しながら使っているのですが、2年前にいろいろある「おえ」に補修工事が入ったのを機に、その隣の事務所として使っていた一角を店舗として使おうということになりました。日本酒は今、非常に消費量が減っているんで、そこを店舗にすると同時にお酒を楽しめる場所にしようとしたのです。その際、私は社長に直訴してその責任者となり、今に至っています。

事務所だったころは町の人が1日に1～2人、お酒を買いにいらっしゃる程度だったのですが、私は人の集う所にしたいということから、二つのことを始めました。その一つは、「蔵元だより」の発行です。そこには、あまり商売に関係ない、周りの風土に関係した原稿を社長に書いていただいて、「いいところだな。行ってみたいな」と思っただけのように工夫しています。鶴来や白山麓のお水のことやお祭りのこと、食べ物について全国発信したわけですが、最初2,000通から出発したものが2年間で6,000通に増えています。これは、蔵に来られたかたが芳名帳にお名前をお書きになる、その住所に「お便りを出していいですか？」とお伺いした上で、お便りを出しているわけです。その結果、全国から「お便りありがとう」ということで、商品を買いに来るといっても、この土地に引かれてお客さんが来られて、ふらりとお餅やおそばを食べられるようになっています。観光客としてではなく、リピーターとしてこの土地を好きになられている方が多いのではないかと私は思っていて、喜んでいるところです。

酒蔵・「おえ」からの文化発信

もう一つは、酒蔵の一部の開放です。今までも見学者はあったのですが、蔵見学に加え、ぎゅうぎゅう詰めて50人入る「おえ」で、コンサートを開くことにしました。これまで、アンサンブル金沢のバイオリニストを招いたり、篠笛、シャンソンなどを行ったのですが、ホールでやるのと違い、演奏されるかたも非常に感動されます。また、裏のほうに昭和初期の庭があって、400～500年の古木や四季折々の



花が咲いています。そこも今、私たちやボランティアのかたの説明つきで見てもらおうようになっています。また、社長室だった店舗の一角をギャラリーに改装し、毎月、器や能面、絵画、写真、グラスなどの展示を催し、それをインターネットで流しています。酒屋なのだから酒を売ればいいと社長に言われることもあるのですが、いろいろなものが混ざり合ったものが文化だと私は考えています。きれいなお水と冷たい空気、良質なお米、それを加工する腕という厳しい条件のもとで江戸時代から行われている酒造りというものを、地域のかたが誇りに思っ、日本酒を飲まなくなっている若い人に語っていただけたらいいなと思います。地域の方々が愛するものは、旅に来られた方にも愛してもらえるのではないのでしょうか。

地元からの手紙 Vol.26

先般玉村豊男さんのお話しを聴く機会がありました。氏は作家であり画家であり、そして農家でもあります。この度ワイン醸造家になったとの発言も飛び出しました。

ぶどうの出荷額があまりにも安いので、ついにワイン造りに手を出したと言われましたが、本当のところは以前から秘かに構想を練っておられた感じでした。そうでなければ、大枚何億もの借金をしてまでスタートさせることにはならないでしょう。失礼ながらのお年で……。しかしロマン多き船出に賛辞をおくりたく存じます。

カルチャーは、日本語で「文化」とも「耕作」とも訳されていますが、「造り酒屋はもともと文化の発信拠点なのだ」と玉村さんは主張されます。なるほど造り酒屋は農業と大きくかかわっていて、農産物をお酒という食文化の一端を担う飲料に仕上げていますし、旧くから地域のランドマークにもなっています。

「その造り酒屋たちが結果ばかり追いかけて、皆スッキリした変わりばえしない酒になってしまったのではないか。発酵の途中にもっと美味しいところがあるのではないかと指摘されました。また「個性とは他と違うことをすることではない。隠そうとしても出てくるのが個性だ。今これが求められている」とも言われました。重く受けとめたいと思います。

いろいろと試行錯誤を繰り返して、研究・工夫を続けながら深く旨い味わいを求めて努力することが酒造りに係わる者として一番大切なことなんだと思ひ直しています。

清酒萬歳楽蔵元 小堀 孝祐

新酒「吟醸生しほり」発売しました。720ml・1,200ml・300ml・500ml

POST CARD

料金別納郵便

新酒を
探りました

〒114-8501 東京都荒川区西日暮里5-1-1
F1 石川 920
A1 東 920
X1 東 920
00 77
6 1
1 1
9 9
3 3
3 1
7 7
5 147

「華やきのしつらいを演出する」
オーストラリアプリザーブドフラワーで迎えるクリスマス。お正月

オーストラリアプリザーブドフラワーは、
西オーストラリアに自生するワイルドフラワー
を11月1日より、お家で楽しむことができます。
ことしのクリスマス、お正月にエッセンス
を詰めたオーストラリアプリザーブドフラワー
の香りだけで華やかさを演出しませんか？
はじけわたるパワーがみなを元気にしてくれます。
お正月に贈るには、お花先生とそのお友達
さんの作品です。

平成15年12月6日(土)～12月21日(日)
●場所 萬歳楽本店 都営本町1丁目7-17 TEL0761(933)1150(直通)
●時間 午前9時～午後4時
●販売/北園美術社、エッセンス野村

で立ち上げ、それ以前から塾への生徒勧誘に自転車で地域を回ったこともあって、地域のかたと密接にかかわるようになりました。去年も中学校で、120人を前に地域の授業をしたところでした。

変な話ですが、その120人の子供たちのおじいちゃんはこの人だったなどという家の歴史を、私が知っているのです。東京と違い、ここではすれ違う人がみんな知っている人なのです。また、良い例えではないですが先月、海外投資を勧誘する事件がありましたが、その被害を受けた人がこの鶴来にけっこういるのです。鶴来やこの山麓というのは、今のようなインターネットの時代にあってもなお口コミの影響が強いので、新聞に出る前にみんな知っているのです。このような、緊密なコミュニティが残っているという状況を、何かに生かしていけないものでしょうか。



地域おこしの核を目指して

僕のように都会からUターンして帰ってくると、この地域のよさが改めて分かります。実は僕は、大学では考古学を専攻していたのですが、そのきっかけは小学校3年生のときに舟岡山の縄文遺跡で友達と土器を見つけたことでした。また、最初に発掘に携わったときには、見つけた弥生土器に指紋が残っていて、左利きの人が左手で巻き上げたことが分かったのです。そういう体験から、自分が手に取れる、目で見られる、においをかぐという体験ができることがいいのではないかと考えています。

僕が学校で授業をするときには、この中から一人でもいい、地元の歴史や文化を引き継いでくれる人が出てほしいという気持ちがあります。ですから、今、歴史研究会の事務局とともにNPO法人「加賀白山ようござった」の事務局もやっています。その中で思うことは、定年退職されてボランティアをやりたいという多くの人を支えるのは、30～40代の人間だということです。そういう人たちが核になって動かないと、こういう地域活動は動かないし、人も集まらないというのが実感です。地域おこしといっても、本当に核となる人がいないとだめなのです。

白山麓と美川・松任とのつながり

先月、東京都の杉並区から「地域おこしで白山連峰合衆国が面白いことをやっているから、教えてほしい」という人が来られました。このように、自分たちがやっていることは全国的に見ても先を進んでいるのです。実は県の会議にもよく出るのですが、新聞紙上で受ける感じとは違い、能登よりも白山麓のほうが文化、歴史、民俗などの総合的レベルが高く、ユニークだと思います。今度、美川町、松任市を含んで人口11万人の白山市となりますが、大きくなればなるほど、つながりが広がってくると思います。例えば美川の人「あの家は大工をしていたうちの父ちゃんが建てたんや」とか、鶴来のことをよく知っています。そのように精神的な近さを非常に感じますので、石川県で第2の都市になることによって、ますます地域のパワーが生まれてくるのではないかと非常に楽しみにしているところです。

話題提供 地域から

「人・つながり、築く白山市」

辻 貴弘（白山連峰合衆国企画担当）

塾講師として知った地元の歴史

私は4月から正式に、白山連峰合衆国の事務局で活動させていただいています。鶴来で高校を卒業してから13年ほど東京に行っており、平成元年に鶴来へ帰ってきました。私の高校の同級生のうち30人ほどが金沢大学へ行っており、ほとんどが小中高の学校の先生をしています。私はこの近くで父親の代から50年近くそろばんの塾をしています。私の代からは高校受験の塾もしており、それが本業です。3年ほど前にこの鶴来で郷土史の勉強会を、ここ「うらら館」

「地域と語る」

司会 水野 昭憲（金沢大学地域貢献コーディネーター）
 辻 貴弘（白山連峰合衆国企画担当）

（水野） では、会場の皆さんから、手取川流域の未来について、何でも結構ですので伺いたいと思います。最初に、今の3人のお話に関して質問やご意見がありましたらお聞きしたいと思います。神谷先生は、地域の教材作りをするという約束をされたように思います。また、小見さんからは、「商品を売る前に地域を売れ。土地に引かれてくる人を作れ」という印象的な言葉がありました。それから、辻さんは地域社会の重要性を自らの体験からお話しされたわけですが、これまでの鶴来町や山麓の村という単位が11万都市となった場合どうなるのかということ、大学のほうから今日のテーマとして提案させていただきたいと思います。

手取川の水濁対策は？

（A） 手取川漁協の者です。漁協ではアユを中心にやっていますが、アユを食する人にも釣る人にも喜んでいただくという中で、手取川の水量の安定性や水質の濁りということは、この辺りに住む人なら誰でも知っている懸案事項です。つまり、25年ほど前に手取川ダムができて以来、水の濁りが長期化しているのです。水が濁ると光が入らず、水ゴケが生えない。したがって、アユの成長が遅れ、品質が劣化するということが、漁業組合の売り上げにも影響するということが、天下の1級河川で続いております。酒造りにしても、観光にしても、その基本には景観の一要素である水があり、その水が我々の生命線にもなっている土地柄だと思います。その懸案をどうしたら解決できるのかを、ぜひ大学で考えていただけるようお願いできないでしょうか。

実は先週の日曜日、石川県が主催する会で「白山の噴火」というシミュレーションがありました。白山の噴火による火山灰で我々下流域・中流域の者がそれなりの影響を受けるということですが、今日に続き、明日は白峰村で国土交通省の「手取湖げんき談義」という集会があります。しかし、どこで質問しても、この地元が抱えている問題点について、はっきりした処方箋をもらえません。案でかまわないので、トータル的なシステムづくり、もしくはテーブル作りについて、お知恵を拝借したいと思います。

（水野） 濁りの長期化というのはずっと話題になっていても、それをどうしたらいいのかというところがないのだと思います。私は、このことについては技術的な水質改善のテクニックの問題と、もう一つは地域の方が清流を本当に自分たちのものとして望んでいるのか、一緒にその声を上げられるのかという二つの観点があると考えます。

（B） 尾口村教育委員会の者です。この会場に美川のかたが来ておられるかどうかは分かりませんが、「美しい川」と書いて美川なのです。しかし、今、漁業組合のかたがおっしゃったように、手取川ダムが



できてから、一回濁りだすとなかなか沈殿してきれいにならない。ダムがなかったころは、雨が降って鉄砲水が出て濁っても、2～3日すればすぐ清流に戻りました。今、司会者が地元のかたがそれほど考えているのかとおっしゃったのですが、私の耳にはそのような声はなかなか入ってきません。下流の美川の方も声を大にして叫んでほしいということを、上流の私たちも思っています。



（中村副学長） 私もアユが好きでよく食べるのですが、金沢でもダムができてからアユがまぶくなったとよく聞きます。手取川のアユはみんな上がってくるのですか。

（A） 手取川でもアユを放流していますが、海のアユを持ってきているのです。九頭竜川には天然アユもありますが、九頭竜川が濁ったとはあまり聞きません。手取川のダムによる濁りの解消が私のテーマです。

（C） 私は辰巳ダムも見ているのですが、辰巳ではヘドロが底にたまってボウフラがわいています。それが放流されるため、ドブ川になるのです。

（水野） 流れが止まってしまうと、川底に泥が積もり、死んだ川のようになるのです。石の表面に藻が生えなくなって、アユの主な食物が無くなるわけですね。

（A） 全国のダムは、年数がたつと放流の水の質が下がります。そのことは、アユを食べればすぐに分かります。そのほかに、手取川ではダムができてからは下流にいつも濁りがあるということが問題です。

（D） 鶴来町で店を営んでいる、鶴来ふるさと歴史研究会のメンバーです。問題は白山の火山灰なのです。なかなか沈まない細かい粒子を含む水がダムにたまるので、1ヵ月ほど濁りが澄まないのです。昔だと、雨が降るとサーッと水が出てサーッと引いてしまったのですが、今はダムで1ヵ月分くらいためてしまうのです。だから、できたものを今とやかく言っても、濁りについては解決できる問題でもないと思います。江戸時代に林瑜さんが『菜根譚』を翻訳しましたね。鶴来は昔から「加賀の書府」といわれていたわけですが。先ほど、辻さんがおっしゃったように、それを若い人に継いでいかなければならないのですが、私は今年七十ウン歳で、研究するにももう芯が止まっているのです。いかに若い人に興味を持ってもらう運動をするかということがいちばん肝要でないかと思います。

（水野） 濁りが火山と関係するということで、恐らくこの地域には火山の関係の研究者はおられると思いますが、川の研究者が少ないということで、それをだれが研究するかをテーマとして持って帰ることになりそうですね。

（中村 浩二） 川や水利の研究は農学部がやるのが普通です。僕は金沢大学に農学部がないことを不思議に思っていますが、何とか皆で考えなければならないと思います。

(O) お店の裏の川が濁っていると、イメージダウンになります。酒屋さんにお酒を買いに来られる人から最近ずっとそう言われているので、どうしてもきれいにしてほしいのです。

海の人と山の人との結びつきを求めて

(E) NPO「加賀白山ようござった」のメンバーです。白山市ができるということで考えてみると、その中には美川、松任の海岸部分と松任の市街、平野の農村部、白山麓、そういう四つくらいの特徴のある地域があるわけです。私たちは、この地域にいる限り白山麓の地域発展という取り組みでいきたいと思うのですが、四つのそういう形に分けて取り組んでいくということは考えておられないのですか。

(水野) 松任から白峰までを一つにすることは非常に苦しいと思います。行政、福祉、それから、気候が全く違います。そういう意味ではいろいろ難しい問題があると思いますが、観光や住民の誇りに結びつくところは、何か一つの共通のものがあっていいのではないかとということで、今日は水の恵みということをテーマに挙げさせていただきました。

(辻) 行政区で8自治体が集まるということは、一部に無理があると思うのです。昭和29年に大合併して今では何の違和感も残っていませんが、鶴来ではいまだに運動会は元の五つの地区でやっています。地域の歴史はやはり受け継がざるをえないのです。しかし、一方で、水野さんが言われた、何かのテーマで結びつくこともある。国の方針によって合併が下りてきたことを逆にチャンスに考えればいい。例えば鳥越の五十谷の大杉を見て黄門橋を渡ると吉野谷の御仏供杉がある。地域の人「あれはうちのもんや」と思っている、外から見ると行政区分とは全然関係がない。

今でも旧鶴来というのは江戸時代からのプライドを持っていると思います。また、金劔宮を守っている氏子という思いもある。僕らの世代は昭和29年の合併を知りませんが、それを知っている人たちが今声を上げて、役所主導ではなく、住民主導の合併にもっていかれればいいと思います。今、行政サイドで、補助金はこうなる、本庁は松任にもっていくという話がどんどん進んでいますが、地域の人はどう考えているかという話があまりにも出てきていない。酒を飲んだときだけ文句を言っているのではだめだと思います。鶴来の悪いところは、みんなで集まると悪いことばかり言うが、それが表に出てこないことだと思います。

(A) 山の人と海の人を結びつけるのは難しい。確かにそれには困難があると思いますが、戦国時代、江戸時代、明治時代と、その時代ごとに乗り越えてきた部分があったと思います。川筋だけで考えると、魚・水・空気いずれにも縄張りはありません。現に石川郡と能美郡は手取川で分かれ、警察も分かれます。密漁者を追いかけるにもこんなやりにくいことはない、それが取っ払われるということは、アユの関係でも随分メリットが広がると思います。

学生の地域貢献の在り方

(水野) 合併の話は大学が関与できる話ではないの



で、皆さんの意識、団結、誇りを掘り起こしたり、情報発信や人づくりをするときに、大学が役割を果たせる部分があるのかどうか、そんな観点からのお話を頂ければと思います。

(F) 金沢大学の学生です。学生に期待される働きについて、地域のかたからお伺いできればと思います。

(辻) 金沢市では長町の朝市などで学生さんとやっている実例がありますが。

(神谷) 2年前ぐらいに鶴来に学生を連れてきたことがあるのですが、基本的に足がないと学生が関与していくのは難しいと思います。長町の経験からいうと、月に1回でも定期的に行くということが重要なのです。

(辻) 私は大学生のときに何ヵ所かの発掘現場に行っていたのですが、学生時代は思い通りに動けるので、学生が手伝ってくれて、それが縁でこちらに定着してくれればいいなと思います。僕の同級生で医者になった者は、みんな外に出ていってしまっています。大学を出た優秀な人が田舎に住みたいという思いを持つような地域づくりが必要だと思います。

(A) 4年間という狭い範囲で考えると、山の下草刈りや川のチェックなど、仕事はないわけではないのです。ただ、それを皆さんのほうに連絡するようなシステムを今まで構築してなかったということです。

(水野) 今日、白峰からお見えの方はいらっしゃいますか。(返事なし。)

白峰村の雪だるま祭りのとき、白峰の一人暮らしの老人宅の雪だるま作りに、学生がボランティアでバスを使って行っています。そのチャンスを作るのがまさに大学や地域であると思います。このような、行政の押しつけではできないこともあるでしょう。

(A) 例えば鶴来の「ほうらい祭り」の金劔宮の旗持ちや御神輿の台持ちは、もう30年ぐらい金沢大学の学生がアルバイトでやっています。

(辻) 数年前には、タンカーから流出した重油の回収にボランティアが参加しましたね。あれをボランティアと言っていますが、交通費も弁当も出ているのです。この「うらら館」を支えているのもボランティアですが、ボランティアはただでは続きません。だから我々は観光ガイドとしてNPOを立ち上げたのです。例えば学生が地域でボランティアに参加したら、その地域だけで使える通貨がもらえるというのはどうでしょうか。これは全国でも例があります。

(F) 学生が何か活動をやるとしたら、無理矢理やれと言われるより、自発的にやるほうがいいと思います。ご飯をもらえるならば僕も行きます。この「うらら館」も今日初めて来ましたが、面白いなと思っています。

(辻) この町は、1990年に商工会の青年部がヤン・フートの現代アートの展示をする町として名乗りを上げたところ、たまたま選ばれて、5回くらい町の中を会場にしてやった経験があ

るのです。でも、続かなかった。しかし、今でも当時の学生と一緒に活動した商工会青年部OBの家を1か月ぐらい泊まり歩くことがあったりと、この地には受け入れの土壌はあるのです。今、八尾などはそれをまねしてやっているのですが、結局お金が続かないと継続しないのです。

「地域まるごと博物館」の実現を目指して

(G) 「加賀白山ようござった」のメンバーです。私は「地域まるごと博物館」というこの構想を大変素晴らしいと思います。その中で、手取川談義と副読本の発行のあとの計画、どれくらいの年数を見られているのかをお聞きしたい。もう一つ、行政・大学・地域住民が手を取り合ってやっていくという構想ですが、実際にこの主体として動くのはどこなのか。住民から声を上げろといっても、ここの住民はなかなか声を上げられない。大学も地域貢献事業の一つとしてこういうことを打ち出しただけで、尻すぼみになっていくのではないかと。ましてや行政は合併を控えてお金を出したくない時代です。そのような中、大学が主体となっていたらいいのか。それとも、我々NPO法人を団体として引きずり込んでやっていけるのか。

(神谷) 今後の事業とタイムスケジュールについては、まだこちらでも試行錯誤です。一つは国土交通省が「水害75周年」ということで、我々と同じように、地域の文化や親水に対する啓蒙活動の一環として、我々の副読本に近いものと考えているようです。そのほかには、大学としていい知恵があればお借りしたいと考えているところです。ですから、タイムスケジュールではっきり決まっているのは3～4年先までです。その後の継続については、こういうこともやっていったらいいというご意見を頂けたらと思います。

エコ・ミュージアムに関しては、大学は主体にはなれないと思います。タウンミーティングと地域貢献事業ということで出てきているということです。しかし、私の地理学や同席の文学部長が研究している文化人類学のように、現場での調査を必要とする学問分野があって、私が2～3年前に鶴来町に来たのも、地域外に住む学生に日本の都市と農村の中間のコミュニティがどのようなになっているかを調べるためでした。その面ではタウンミーティングや地域貢献事業に継続的にかかわることが、研究に大いに役立ちます。大学が独立法人になったら変わるかもしれませんが、大学が直接に主体になることが難しいとしても、受け皿としてのNPOに大学の教員、学生が加わる形ができればいいなと思っています。

(D) そのように、教えてもらいながらという形がいちばんいいと思います。ただ、私どもは白山麓の歴史・文化・伝統・風俗・自然・人々、それを発掘して紹介しながら、先生がおっしゃった「地域まるごと博物館」の考え方でやっていますので、できたら私ども法人の「知の泉」としての顧問になっていただけたらありがたいと思います。

(H) 4年後に石川県に「自然史資料館」ができます。たまたま昨日、兵庫県にある「人と自然の博物館」を見に行ったところ、自然史だけではなく、人と自然のかかわりのようなものをアピールしていて、見学に来るのも主婦のかたが非常に多かったわけです。ここに石川県白山自然保護センターや石川県林業試験場の方もいらっしゃいますが、そういう新設・既存の施設とうまく連携していくと、さらに深まると思います。

大学の地域貢献と大学間の連携

(D) 地域貢献ということで、石川県の各大学との連携は考えておられるのですか。



(中村副学長) 大学間ではそれぞれ特殊性を出してコンピート（競合）していく側面と連携の側面があると思うのです。何が連携できて何ができないかです。また、現在、大学はいい意味での競争状況にあるので、うまく大学を利用していただければと思います。地域から大学が連携できる課題を出していただければ、大学が連合した形でやるということになります。

(D) どんな組織を作っても、予算がなくなったり、その会に魅力がなくなったり、構成員が年輩になったりするとみんなつぶれてしまうのです。私は尋常高等小学校しか出ていませんが、「ようござった」は自分たちで発掘するから面白いので、予算がなくとも続くと思います。数が寄れば力になります。私たちは力はあるので、ハンドルを切り損ねないように、先が読める学者の先生のお力を借りたいと思います。

(水野) エコ・ミュージアムの看板を上げている所は、全国にはいくつもあるのです。大学にはそういう情報が入ってきやすい状況にあります。また、そういう所にはアドバイザーとしての先生がついていたりします。また、金沢大学でもそうですが、全国に里山という活動をやっている所もたくさんあります。早いうちに看板を上げたほうが勝ちかなという気もしますので、大学を情報源としてどんどん使ってほしいと思います。

(河村) 法学部の河村です。まちづくりでもそうですが、市民の方々が分からないことに大学の先生が出ていって難しいことを言うのはだめだと思います。しかし、市のほうがこういうことをやりたいと宇宙人のような専門用語で話すときに、住民との間に入ってそれを翻訳するというには大学の先生は使えると思います。その場合、いろいろな学部の先生がいる大学が優位ということになるでしょう。皆さんにも、大学にはこういう先生がいるのだということを知ってもらいたいと思います。

(鹿野) 私は文化人類学をしていますが、地域貢献という言葉をあまり信用していません。特に学生は何もできないと思います。ただ、大学は今、キャンパスを出て地域そのものをキャンパスとして使わせてほしいということを言っています。ついでに言えば、皆さんを無料の非常勤講師として使おうということです。今、神谷さんが具体的に考えておられるのは、地域交流演習という授業で、学生を連れて数ヵ月か1年、県内各地域を回ろうということです。実際ここ20年の間に、鳥越村の別宮、鶴来町の新町と月橋、吉野谷村の中宮、吉野にお世話になったことがあります。私はインターネットがあっても、生で話を聞かないと学生には分からないことがあると思っています。これは単発のボランティアやアルバイトということではなく、正規の授業に組み込むことを今考えていますので、私たちに何ができるかは分かりませんが、何かあれば窓口となっている水野さんの地域貢献推進室にお声をかけてください。何を持ち込んでいただいてもいいように1,000人ほどの教員ネットワークとその利用の仕組みができれば、皆

さんの要望に応じて我々は出てまいります。

(水野) 結局、行政や大学側の押しつけではなく、エコ・ミュージアムづくりに皆で手を挙げようということですね。

滞在型観光は実現可能か

(I) 現在、富山大学の大学院に在籍している学生です。僕は、エコ・ミュージアムの主体は、やはり住民であるべきだと考えています。人間は人から押しつけられて何かをするのでは長続きはしないと思います。現在、河内村で文化人類学の調査をしているのですが、地域のために何かしたいという30～40代の人たちがいます。そういう人たちが集まれる場所や機会を提供していくのが自治体で、その間に入るのが大学ではないかと考えます。

神谷先生に質問ですが、エコ・ミュージアムといっても日本には滞在的な観光というものはあまり定着していないように思います。手取川流域となるとかなり広域になるので、1泊2日でできる観光ではありません。その点をどう考えておられるでしょうか。

(神谷) 確かに日本の30～40代は猛烈に忙しいので、ヨーロッパのように1週間の休みを取るのは無理だと思います。しかし、11月には3連休が3回もあります。1泊7000円を5000円にするなどの地道な努力で、滞在期間を延ばしてもらえる方向性は考えられないでしょうか。

(鹿野) 滞在しなければいけないというコンセプトではないと思います。金沢の人がこちらに1～2か月に一度、車でやってきてもいいわけです。ただ、白山市になれば、美川や松任のパンフレットを別々に集めるのではなく、地域トータルで一つのコンセプトができるのではないのでしょうか。

(D) “いやし”を求めて来る人は今後増えると思いますか、減ると思いますか。

(鹿野) 中に住んでいる人が住みにくいと思っている所が、外から来る人にとって面白いはずがありません。“いやし”になるのかどうかは分かりませんが、住民が誇りを持っている所は来て楽しいと思われるのではないのでしょうか。

(辻) 鶴来の博物館の学芸員から、「エコ・ミュージアム構想をぜひ推進してほしい」という伝言があります。河口の美川からこちらまで施設は幾らでもあります、現在、それを生かし切れていません。役所主導ではなく、住民の声が反映するような博物館、美術館になってほしいので、先生方にもその舵取りをお願いしたい。私も先日、白山連峰合衆国大統領（水原氏）と一緒に合併の会議に参加したのですが、事務手続きばかりで、夢がなく、全然面白くありませんでした。それをエコ・ミュージアムとするには、やはり学問が絡んでこない、地域住民のレベルでは難しいのかなと思います。



(A) 歴史を語るときには、手取川の向こう岸も加わって、交流できればいいですね。

(中村浩二) 今日は川の話、水の話に加え、当然、山の話も入ってきます。白山のてっぺんから海まで全部つながっているという大きな話ですので、当然、利害対立もあるわけです。全国的には今、漁師さんが山のてっぺんで木を植えるということも始まっていますが、利害の対立については住民で話し合ってくださいしかありません。また、すでに白山自然保護センターや昆虫館などの施設があるし、NPOも幾つもあります。まず、今あるところが交流し、議論していく。そして、川の濁りなど自分たちだけでは解決がつかない問題については、金沢大学やほかの大学にも声をかけていただければいいと思います。



(河村) 県はまちづくりのコンセプトを作る前に、合併を自己目的化して、ゴールを作りがっているわけです。ところが、白山市の場合も民間の業者にまちづくりのプランニングを任せている。それで本当にいいのですかということです。我々大学も声をかけてほしいと思っていますし、ある程度の力にはなれるとも思っています。しかし、その際にもまちづくりのコンセプトは住民の皆さんが考えるものなのです。その上で、「こういうことをしたいのだけれど」と大学に話を持ってきていただくと非常にありがたいと思います。

まとめと挨拶

中村 信一（金沢大学副学長、金沢大学地域貢献推進室長）

私は白山の診療所に居たことがあるもので、鶴来にはよく来るのです。今日はお酒の文化についての議論はあまりありませんでしたが、最近、日本酒の需要が落ちていて聞いて、びっくりしました。辻さんのお話を聞いても思ったのですが、エコ・ミュージアムにしても何にしても、お酒の文化をはじめ、やはり各々の文化を残さなければ何にもならないということです。



今日は、昨年度の輪島、加賀に続く金沢大学としての3回目のタウンミーティングでした。輪島、加賀では産学連携の話が多かったのですが、今日は文化的な内容が多かったということで、この点でこそ大学の持っている総合的な力を発揮できるのではないかと考えています。これまで大学は地元に着目すると時代の先が見えなくなるとか言っては、地域とは疎遠にやってきました。しかしその一方で、大学は物事を研究する、解析する、洞察するという非常にいい側面を持っています。地域が文化を残し、大学がそれをサイエンスとして研究し、そして、文化とは何かという地域の求めにこたえていくのが大事な使命だと思います。

その窓口としてコーディネーターがいますので、地元の要請をきちんと聞いて、それを教

育・研究の場に伝えていくことで、地域との連携を進めていくことが非常に大事だと考えています。今日はたいへん貴重なご意見をありがとうございました。今、大学の使命が歴史的に変わってきています。これからは社会貢献，産学連携，人材養成，地域の課題の解決を目的として，金沢大学ができることに全力で取り組んでいきたいと思っています。

最後になりますが，白山市タウンミーティングの開催にご協力いただいた「白山連峰合衆国事務局」と「加賀白山ようござった」の皆様，本日ご発表された方々，そしてこの会にお集まりになった地元の皆様に感謝を申し上げて，私のご挨拶とさせていただきます。

閉 会

(総合司会) インターネットで金沢大学のホームページを見ていただくと，今，金沢大学にどんな教官がいてどんな研究をしているかが分かるようになっていきます。時々見ていただいて，ご連絡を頂ければと思います。今日は長時間，ありがとうございました。

日 程

日 時	平成15年12月15日（月）19：00～21：00
会 場	鶴来町「横町うらら館」（鶴来町新町タ1）
主 催	金沢大学・石川県・金沢市連絡協議会
共 催	白山連峰合衆国
協 力	NPO法人「加賀ようござった」
大 学 側 出 席 者	中村（信）、松坂、水野、中村（浩）、鈴木、太田、島田、上口、 山本（以上地域貢献推進室）、神谷（講師）、鹿野、梶川（以上文学部）、 田中（共同研究センター）、河村（法学部）、小村（自然計測応用研究センター）

プログラム

テーマ：「手取川流域のあした」

総合司会：鈴木 漠（金沢大学大学教育開放センター教授）

プログラム（19：00～21：00）		
19：00 ～19：05	趣旨説明	水野昭憲 （金沢大学地域貢献コーディネーター）
19：05 ～19：10	あいさつ	水原 保 氏 （白山連峰合衆国大統領）
19：10 ～19：30	話題提供（大学から）	「手取川流域はエコ・ミュージアム」 神谷 浩夫氏（金沢大学文学部教授）
19：30 ～20：00	話題提供（地域から）	「酒蔵から文化の発信を」 小見 麻利子氏（唎酒師） 「人・つながり、築く白山市」 辻 貴弘氏（白山連峰合衆国）
20：00 ～20：55	意見交換会	司会：水野 昭憲、辻 貴弘氏
20：55 ～21：00	まとめ・閉会	中村 信一 （金沢大学副学長・地域貢献推進室長）

出 席 者

63名

あ　と　が　き

国立大学の法人化を間近に控えた今、大学が発するものの中に、教育・研究はもとより社会貢献を大学の重要な使命とし、地域に根ざした大学でなければ生き残れない、といった言葉が目につくようになった。

これまでも、金沢大学では公開講座、先進医学と地域医療、工業技術の共同研究、教員養成など多くの分野で社会貢献が定着していたと考えている。しかし大学が文化的活動や地域住民への積極的なサービスを考え、地方自治体との組織的連携を糸口にしようとしたのは近年のことである。大学と地域社会が相互理解を深めているか、地域住民のニーズと合致しているのか、と問われれば、いまそれを求めていると答えざるをえない。それにはまず住民と大学関係者が互いに顔を合わせて意見を交換できる雰囲気づくりが必要である。

金沢大学にとって地域とは石川県であると捉えて、県内の自治体と協力してタウン・ミーティングを開いてきた。平成15年1月の能登（輪島市）、2月の加賀（加賀市）では、大学への様々な意見や要望などを聞くことができた。今回は、手取川流域8市町村が合併し平成17年には白山市となることが決まり、広域の共同体意識が高まりつつある白山麓を訪れた。開催に当たっては、白山麓町村の商工観光行政連合である「白山連峰合衆国」事務局と、NPO法人となって地域の歴史・文化の掘り起こしと観光振興を目指している「加賀白山ようござった」の協力を得て開催できた。ご協力いただいた関係者に心より感謝申し上げる。

暖冬気味に推移していた12月であったが、タウン・ミーティングの夜は霰混じりの寒い日になって、話を聞きに行こうと思っていた人の中に出かけにくかった人もあったであろう。それでも地域から33名、金沢大学から地域貢献推進室関係者など15名、マスコミ関係5名、大学生6名の合計63名の参加者があった。

話題提供では、地域の文化への熱い思いが語られた。意見交換で、一般参加者からは、①手取川ダム下流の水の濁りの問題について大学が研究に取り組んでほしい。②学生が地域の祭りや活動にボランティアとして参加してほしい、など多くの意見が出された。「横町うらら館」の座敷には、会場いっぱいの人が入って、熱心な議論となった。意見交換に予定していた約1時間はまたたく間に経過し、会場からの挙手が止まないままに時間切れで閉会した。

過去のタウン・ミーティングでもそうであったように、当日十分尽くせなかった意見や要望についても、この会を契機に相互情報交換がしやすくなり、従来からの大学と地域社会との連携の幅が広がり、これまでの行政的手法からは出にくかった連携のアイデアも生まれ、住民主体の活動の芽生えにもつながることを期待している。